

日中対照実験からみる代名詞主語とその省略

柴田 奈津美

要旨

中国語や日本語のような形態的一致を欠く言語では、代名詞が省略された場合、先行詞の同定は形態的情報に頼ることができないため、文脈に依存することになる。「必要以上の情報を与えてはならない」、「曖昧な言い方を用いてはならない」といった会話の一般原則（Grice 1975, Levinson 1987a, 1987b 他参照）を踏まえると、「代名詞は、曖昧性を引き起こさない限りにおいて、省略できる場合には通常省略される」と考えられる。本研究は、日本語との対照実験を通して、中国語の代名詞は省略しても曖昧性が起きない環境においても頻繁に用いられるということを明らかにする。さらに、詳細な実験データの分析により、接続形式の乏しい中国語では、代名詞主語の出現が文接続を補っているということを指摘する。このことは、中国語と同じように形態的一致を欠くが、接続形式が比較的豊富な日本語と比較することでさらに裏付けられる。

キーワード：代名詞，代名詞省略，指示形式，文接続，主語

1. はじめに

同じ表現の繰り返しを避け、代用表現を用いるという方略は自然言語に一般的に観察される特徴のひとつである。その典型的な例として代名詞が挙げられる。代名詞の持つ情報は、言語により違いはあるものの、人称、数、性、格などに限られる。代名詞自体は固有の指示内容を持たないため、代名詞に遭遇する度に、聞き手は少ない情報を手がかりに、代名詞の指示内容を決定する要素、すなわち先行詞を文脈に応じて探さなくてはならない。代名詞を用いず、指示対象が明確な名詞句を使用すれば、そのようなコストは生じないにもかかわらず、あえて代名詞が用いられるのは、「必要以上の情報を与えてはならない」という会話の一般原則に基づいている（Grice 1975, Levinson 1987a, 1987b 他参照）と考えられる。

代名詞は常に音形を持って現れるわけではない。代名詞省略言語と言われる言語では、しばしば代名詞は省略される。イタリア語やスペイン語などのロマンス諸語では、代名詞の担う人称や数などの情報が動詞に形態的に明示されるので、代名詞が省略された場

合も、先行詞を同定するのに必要な情報は失われないと考えられる。一方、中国語や日本語のような形態的一致を欠く言語では、代名詞が省略された場合、何が省略されているのかを示す形態的手がかりがないため、先行詞の同定は文脈からの情報に大きく依存することになる。したがって、中国語や日本語のような言語では、省略しても文脈から先行詞の同定が可能な場合のみ、代名詞は省略されることになる。また、「必要以上の情報を与えてはならない」という会話の一般原則から、代名詞は省略可能な場合には通常省略されることが好まれると予測される。実際、Chomsky (1981:65) は、代名詞が任意で省略できる環境では代名詞は通常省略されると述べ、これを「代名詞回避の原則 (Avoid Pronoun Principle)」と呼んでいる。(以下、*e* は省略された代名詞を表す。)

(1) 清史は{彼が/*e*}アメリカへ行くことを望んでいる。

(2) a. 张三 去 公園, *e* 跑-了 一个钟头 的 步。
張三 行く 公園 走る-ASP 一時間 DE 歩

b. 張三は公園に行って *e* 一時間走った。

たとえば、(1) の例では、埋め込み節の代名詞“彼”が主節の主語“清史”を指す読みは通常容認されず、そのような解釈を表す場合には、通常代名詞は省略される。中国語でも同様に、(2a) のような文脈において代名詞は省略される傾向にある。ただし、Takami (1987) などが指摘するように、代名詞はいつでも省略可能なわけではなく、省略されることで先行詞の解釈に曖昧性が生じる場合には、代名詞は省略されずに顕在的に現れる傾向がある¹。Takami はこれを「曖昧性回避の制約 (Avoid Ambiguity Constraint)」と呼んでいる。

(3) 初めて清史_iが奈美子_jに出会った時、{*e*_i/彼_iは/彼女_jは} まだ3歳だった。

(3) の文脈では代名詞を省略した場合、明示的な文脈がない限り先行詞が“清史”であるのか“奈美子”であるのかを特定することは困難である。このように、代名詞が省略されることで曖昧性が生じる場合には代名詞は顕在化される傾向にある。これら二つの制約は「必要以上の情報を与えてはならない」、「曖昧な言い方を用いてはならない」といった会話の一般原則とも合致する (Grice 1975, Levinson 1987a, 1987b 他参照)。よって、以上二つの制約を考え合わせると、「代名詞は、曖昧性を引き起こさない限りにおいて、省略できる場合には通常省略される」ということができる。

中国語と日本語は、いずれも名詞句と動詞との間に形態的一致を要求しない言語であるため、代名詞が省略された場合、先行詞の同定は文脈に依存することになり、単純に考えると代名詞省略が可能な環境はいずれの言語においても同様であるように思われる。しかしながら、実際には日本語では代名詞が省略可能であっても中国語では省略不可能な場合がしばしば見られる。

(4) a. 张三 一个人 在 教室 做 作业, 他 想:
張三 一人 ~で 教室 する 宿題 彼 思う

“有 人 帮 我 做 多 好”。
 いる 人 助ける 私 する はるかに 良い

- b. 張三は一人教室で宿題をしていて、「誰か手伝ってくれる人がいたらなあ」と *e* 思った。

(4b) の日本語では代名詞省略が可能なことからも窺えるように、(4a) で出現する代名詞は曖昧性回避の働きを担っていないと考えられる。本稿では、このような中国語の代名詞主語に関して、中国語は時制がなく接続形式に乏しい言語であるため、代名詞主語によって文接続を補っているということを、実験データに基づき論ずる。そして、このことは日本語と比較することでさらに裏付けられることを示す。また、主語の出現により文接続を補うということは、決して中国語のみに見られる方略ではなく、日本語の主語主語も文接続を補う働きを担うことができるということも論ずる。

2. 研究対象

本稿では、主語の省略のみを研究対象とする。それは通言語的に見て、主語の省略と目的語の省略では性質が異なることが指摘されているからである (J. Huang 1989 他)。たとえば中国語では、(5) のように主語及び目的語の省略が可能である (例文はいずれも J. Huang 1989: 187 による)。

- (5) a. 张三 看-見 李四 了 吗? (張三は李四を見ましたか?)
 张三 見る 李四 ASP Q
 b. (他) 看-見 (他) 了。 ((彼は) (彼を) 見ました。)
 彼 見る 彼 ASP

しかし、以下のような文では主語の省略と目的語の省略で性質の違いが観察される。

- (6) a. 张三 说 [e 很 喜欢 李四]。(李四が好きだと張三が言った。)
 张三 言う とても 好き 李四
 b. 张三 说 [李四 很 喜欢 e]。(李四が好きだと張三は言った。)
 张三 言う 李四 とても 好き

(6a) では、埋め込み節の主語が“张三”である読みと張三以外の人である解釈が可能である。これは、省略された埋め込み節の主語に三人称代名詞“他”を置いた時と同じである。一方 (6b) では、省略された目的語が主節の主語の“张三”である読みは不可能で、张三以外の誰かを指す解釈のみ可能となる。(6b) の場合、省略された埋め込み節の目的語に“他”を挿入すると、「他=张三」の読みが可能となる。この事実から、J. Huang (1989) は省略された目的語は代名詞とは性質が異なることを指摘している。本論も J. Huang の観察に従い、主語位置での三人称代名詞とその省略のみを研究対象とする。また、“它”は無生物を指す場合、基本的に主語として用いられないため (Li and Thompson 1981: 135)、本研究では有生物を指す三人称単数代名詞 *tā* (他/她/它) とその省略のみを研究対象と

する²。

3. 先行研究

3. 1 指示形式の選択に関するモデル

談話における指示形式（省略、代名詞、普通名詞句）の選択に関しては、これまで通言語的な観察をもとに、認知モデル (cognitive model)、話題連続性モデル (topic-continuity/distance model)、語用論モデル (pragmatic model) などのモデルが提唱されてきた。しかし、省略と代名詞の選択に関して明確に述べているものは少ない。

認知モデルは、談話における指示形式の選択は、意図された指示対象が認知的にどれだけ活性化されているかに依存すると考える。Tomlin (1987)、Tomlin and Pu (1991) は中国語話者に対して実験を行い、聞き手の記憶において指示対象が活性化されているだろうと話者が判断した場合、省略や代名詞が使われ、活性化されていないだろうと判断された場合には名詞句が用いられるという結論を導きだしている。よって、ある指示対象に対する注意が継続している場合は省略か代名詞が用いられ、注意が中断した場合には名詞句が用いられる。このモデルは名詞句と省略および代名詞の間の指示形式の選択に関しては説明を与えているが、省略と代名詞は同一に扱われており、両者の間での選択がどのような原理に基づいて決まるかに関しては明確な主張を打ち出していない。

話題連続性モデルによると、指示形式は話題がどれだけ連続しているかに従って選択される (Givón 1983 他)。つまり、最も話題が連続している場合には省略または代名詞が使用され、連続していない場合には名詞句が選ばれる。話題が連続しているかどうかは、最後に同じ指示対象が出現してからいくつの節が介在しているか、他の指示対象がいくつ介在しているか、といったパラメータによって決まる（詳しくは Clancy (1980) などを参照。なお、談話モデルの一種として Fox (1987) の階層モデルも挙げられるが、ここでは扱わない）。このモデルでは、代名詞は省略と名詞句の間に位置づけられている。しかし、省略と代名詞がどのような基準をもとに選択されるかに関しては、検証可能な形で主張がなされているとはいいがたい。たとえば、Hinds (1983: 71) は「省略は最も話題が連続していることを示し、名詞句は逆に最も話題が連続していないことを示し、独立代名詞はその中間に位置する」という大雑把な記述を与えるだけに留まっている。

最後の Y. Huang (1994, 2000) の支持する語用論モデルでは、Levinson (1987) の「情報は過不足なく与えられなくてはならない」という Q 原則、「必要以上の情報を与えてはいけない」という I 原則、「有標表現を理由なく使用してはいけない」という M 原則に従って、指示対象の同定が可能な文脈においては情報量の少ない言語形式、つまり省略 > 代名詞 > 名詞句の順で指示形式が好まれると予測される。このモデルは、冒頭で紹介した「代名詞回避の原則」と「曖昧性回避の制約」が予測するように、代名詞が任意で省略できる環境では、代名詞は通常省略され、代名詞が省略されると曖昧性が生じて

しまう場合には代名詞が用いられることを予測する。さらに、代名詞がこのモデルで示すような語用論的要因のみで省略されるのであれば、日本語と中国語のように、動詞と名詞の間の一致がなくかつ代名詞省略を許すという点で同じタイプに属する言語間では、省略形式の分布に大きな差は見られないことが予測される。

3. 2 代名詞の出現に関する日本語特有の特徴

前節で述べたモデルは、主として指示形式の選択に関する通言語的特徴を捉えようと意図されたものであるため、日本語と中国語の間の差は予測しない。先行研究では、このような通言語的観察の他に、個別言語における代名詞の使用の特徴に関しても報告されている事実がある。例えば、Hinds (1978) は日本語の三人称代名詞の使用に関して、指示対象と話し手の個人的関係に関して特定の前提を伴うことを指摘している。したがって、有名人や映画の主人公のような個人的な関係がないような指示対象には三人称代名詞「彼・彼女」を用いることはできない。よって、物語を語るような文脈では語り手と登場人物の間に個人的関係はないため、代名詞は出現しないことが予測される。前節で述べたモデルも勘案すると、そのような文脈では、代名詞を省略しても曖昧性が生じない場合は省略し、省略が不可能な場合は代名詞ではなく名詞句が用いられると予測される。一方、中国語では代名詞に日本語のような制約がないため省略＞代名詞＞名詞句の順で好まれる。よって、同じ物語を語った場合、中国語と日本語で省略の使用に違いは見られず、中国語で代名詞が使用される部分は日本語では名詞句によって表されると予測される。

3. 3 代名詞の出現に関する中国語特有の特徴

日本語だけでなく、中国語の代名詞に関してもその使用について観察、報告がされている。Li and Thompson (1979) は、中国語では代名詞は通常省略されるが、話し手あるいは聞き手が前文と後続の文の結合が弱いと判断した場合に代名詞が挿入されると述べている。具体的には、(i) 背景情報から前景情報、前景情報から背景情報への情報の転換がある場合、(ii) ある種の副詞表現、たとえば時を表す句や“但”など対比を表す表現の後に、代名詞は顕在化される傾向があると報告している。それぞれの具体例は以下に示す通りである³。

- (7) 外边走进一个人来[, ...][e]走进门来[,]和众人拱一拱手[,][e]一屁股就坐在上席[,]他姓夏。(Li and Thompson 1979: 325-326)

(外から人が入ってきた。... e ドアから入ると、みなに拱手し、e すぐに上座についた。彼の名は夏という。)

- (8) 这王冕天性聪明[,]年纪不满二十岁[,] [e]就把那天文、地理、经史上的大学问, 无一不贯通[,]但他性情不同[,] [e]既不求官爵[,] [e]又不交纳朋友[,] [e]终日闭

戸读书[。] (Li and Thompson 1979: 323)

(この王冕は生まれつき賢く、年齢が 20 歳になる前に、*e* 天文学、地理、古典的学問の全てに精通していた。ただ彼は性格は変わっていた。*e* 官僚の地位を得ることを望まず、*e* 友人も作らず、*e* 終日家にこもって勉強した。)

つまり、Li and Thompson によれば、中国語においては前文との間に何らかのギャップがある場合、代名詞が顕在的に現れる。

Li and Thompson (1979, 1981) のこのような指摘は、いつ代名詞主語が顕在化するか、の指摘にとどまり、なぜ代名詞主語が顕在化されなくてはならないのかに関しては議論されていない。さらに、分析に使われた材料は複数の登場人物が現れるため、出現した代名詞が曖昧性解消に寄与しておらず、純粹に前後の文の間に何らかのギャップがあるために出現しているのかどうか判断し難い。また、情報のずれと代名詞主語の顕在化が関係しているのは中国語特有の現象なのか、あるいは通言語的に見られるものなのか、顕在的代名詞は曖昧性解消に寄与しているのか否か、などということに関しても議論されていない。そこで、本研究では、中国語と同じタイプの代名詞主語省略言語である日本語との対照実験をもとに、(i) 中国語の代名詞主語は曖昧性解消以外の理由でも用いられるのか、(ii) もし中国語において代名詞が曖昧性解消以外の目的で出現するのだとすれば、それはどのような理由でどの程度用いられるのか、(iii) 前後の文の間に情報のずれが生じた場合に代名詞が出現する傾向があるのはなぜか、(iv) 代名詞の顕在化はある種の副詞表現（とりわけ“但”など対比を表す表現）の有無と相関しているのか、といった点を中心に考察を進める。

4. 実験

4. 1 目的

中国語では曖昧性解消以外の目的で代名詞主語が用いられるのかを検証する。また、もし使われるとしたら、なぜ使われるのか、どの程度使われるのかなど、前節であげた 4 点を中心に実験データを元に議論する。

4. 2 実験方法

実験に参加したのは、中国大陸出身の中国語を母語とする 23 歳から 27 歳の女性 10 人と 23 歳から 27 歳の日本語を母語とする関東地区出身の女性 10 人である。実験は、中国語または日本語を母語とする被験者にテレビアニメを見せた後、その内容を語ってもらうという産出課題 (production task) で行われた。産出課題は、それぞれの被験者から全く同じデータを取ることはできないが、最も自然な発話データが収集できるという利点がある。ここでの実験目的は談話における代名詞主語の分布を観察することにあるため、自然な発話データを収集できる産出課題が本研究に最も適しているといえる。被験

者に見せた映像はアニメ「ドラえもん」の中国語版「离家到无人岛」、日本語版「無人島はボクの島」で、長さはいずれも 6 分 26 秒である。以下は物語の梗概である。

- (9) ある日、のび太は帰りが遅かったことで両親に叱られ、家出を決意する。そしてタケコプターで無人島に行き、ひとりで生活を始める。食料を持ってこなかったため、すぐに家に帰りたくなるが、不注意からタケコプターを失い、家に戻れなくなる。そこで、ドラえもんのポケットから持ってきた道具を使って、助けを待ちながら無人島で生活する。しかし、一向に助けは来ず、ついに十年の月日が経ってしまう。諦めかけた時、十年前に役に立たないと思って捨てたドラえもんの道具を拾う。懐かしがってボタンを押してみると、ドラえもんが助けに来る。その道具は SOS 発信機だったのだ。そしてのび太はタイムマシーンで十年前の家出した夜に戻る。

重要なのは、この映像の 1 分 09 秒から 5 分 26 秒まで（日本語版では 1 分 09 秒から 5 分 01 秒まで）の約 4 分間、登場人物はのび太一人になるということである。この約 4 分間は他の人物が登場せず、のび太が独りで生活している様子を描写しているので、この場面を語っている際に代名詞が使われていれば、それは曖昧性を解消する以外の理由で用いられていることが強く示唆される。

4. 3 予測

もし語用論モデルのみで代名詞の出現が説明可能だとすれば、指示表現の選択において日本語と中国語の間に大きな違いは見られないことが予測される。特にのび太一人の場面を語る際には、登場人物が他にいないため、両言語ともに省略が好んで用いられることになる。省略形式が使えない場合、次に好まれる指示表現は代名詞である。ただし、上述したように、日本語では個人的な関係がないような指示対象には三人称代名詞を用いることはできない。これを踏まえると、語り手（被験者）と物語の登場人物（ドラえもん、のび太など）の間には個人的な関係はないので、この実験において日本語では三人称代名詞は用いられないということになる。よって、単純に語用論モデルの予測に従えば、中国語の代名詞によって表されるものは、日本語においては名詞句によって主語が顕在化されることが予測される。

4. 4 日本語の実験結果

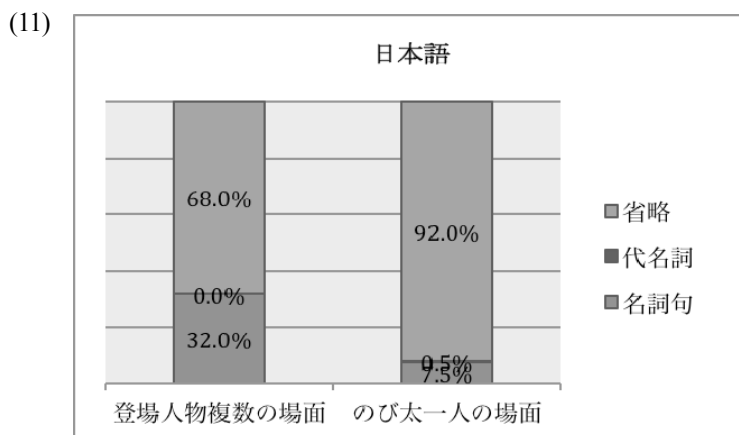
実験の結果は (10), (11) に示す通りである。(10a) は登場人物が複数の場面における代名詞主語の省略、(顕在的) 代名詞、「のび太」「ドラえもん」のような名詞句の出現数とそれらの割合、(10b) はのび太一人の場面のそれらの出現数と割合を表したもので、(11) は (10) のデータをグラフにしたものである。

(10) a.

登場人物複数の場面		
省略	68.0%	230
代名詞	0.0%	0
名詞句	32.0%	108
合計	100.0%	338

b.

のび太一人の場面		
省略	92.0%	357
代名詞	0.5%	2
名詞句	7.5%	29
合計	100.0%	388



(10), (11) に示すように、日本語では代名詞はほぼ観察されなかった⁴。これは先に述べたように、日本語において代名詞は個人的関係のない対象には使用できないという制約があるためである (Hinds 1978)。名詞句はのび太ひとりの場面になると大幅に減少し、9割以上の主語が省略されていることが分かる。これは、登場人物がのび太一人であるため省略しても曖昧性が生じず、容易に指示対象が同定可能であるためである。(12), (13)はそれぞれ、登場人物複数の場面とのび太一人の場面を語ったデータの一部である。

(12) ...毎日怒られているばかりののび太は、うるさい親が、ほんと嫌になり、*e* 家出をすることに、*e* 決めました。のび太が家出をするということに、ドラえもんは、反対しましたが、のび太は、ドラえもんの苦手な、ネズミのおもちゃを使って、*e* ドラえもんを気絶させ、...

(13) ...それで*e* 家出をする時に「どこへ行こうかな」と*e* 考えて、...えっと.....*e* 無人島に行こうと*e* 決め...て*e* 探します。すると意外にすぐ無人島が見つかったので、*e* そこに降りたって、*e* 夜...寝て...、*e* 次の日から探検しようと*e* 思って*e* 眠ります。このような実験結果から、語用論モデルが予測するように、日本語においては省略が好んで用いられ、省略すると曖昧性が生じる可能性がある場合には名詞句が用いられることが分かる。この日本語の実験結果を念頭に、次節では中国語の実験結果を分析する。

4. 5 中国語の実験結果

中国語の実験の結果は (14), (15) に示す通りである。登場人物が複数の場面に比べてのび太一人の場面では名詞句の割合が減り、省略や代名詞が好んで用いられている。

これは登場人物が一人であれば、指示対象を明示しなくても曖昧性が生じないためであると考えられ、語用論モデルの予測と合致する。実際、のび太一人の場面で出現した名詞句 31 例のうち、約半数の 14 例が“哆啦 A 夢 / 机器猫 / 叮铛”（ドラえもん）であった。

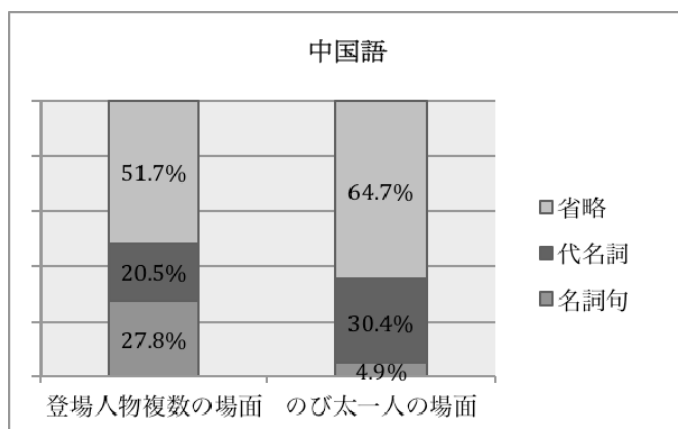
(14)a.

登場人物複数の場面		
省略	51.7%	197
代名詞	20.5%	78
名詞句	27.8%	106
合計	100.0%	381

b.

のび太一人の場面		
省略	64.7%	410
代名詞	30.4%	193
名詞句	4.9%	31
合計	100.0%	634

(15)



(16) のように「ドラえもん」が文脈に導入された場合は“大雄”（のび太）も出現する傾向があり、これらの名詞句は曖昧性解消に寄与していると考えられる。

(16) ...可是大雄等了一天，*e* 等了一个月，*e* 等了一年，机器猫也没有来。eh... *e* 又等，又过了十年，大雄的头发都长得很长，胡子也长出了很多，机器猫还是没有来。eh... 大雄非常地难过，...

（しかしのび太が一日待っても、*e* 一ヶ月待っても、*e* 一年待ってもドラえもんは来ません。さらに *e* 待って 10 年が過ぎ、のび太の髪の毛も長くなり、髭もたくさん生えてきましたが、ドラえもんはまだ来ません。のび太はとても悲しくなって...）

日本語の実験結果と比べると、興味深いことに、それぞれの場面での名詞句の割合が両言語でほぼ一致している（日本語における名詞句の割合は、登場人物が複数の場面：32.0%、のび太ひとりの場面：7.5%）。両言語ともに曖昧性解消に名詞句が使用されていたことを勘案すると、これは自然の結果と言える。注目すべきは代名詞と省略の出現割合である。それぞれの場面での中国語の「省略+代名詞」の割合は、日本語の省略の割合とほぼ同じである（日本語における省略の割合は、登場人物が複数の場面：68.0%、のび太ひとりの場面：92.0%）。これは、日本語において省略できる代名詞が、中国語では顕在的に現れていたことを示唆する。特にのび太一人の場面では省略しても指示対象

の同定に困難をきたさないことは、日本語では省略形が使われていたことから明らかにであり、ここに登場する代名詞は曖昧性解消には寄与していないことがよく分かる。(17) は実際のデータの一部である（日本語訳にある括弧付きの「彼は」は中国語で顕在化している代名詞主語を表す）。

(17) ...可是島上几乎没有食物。他_他想_e 摘椰子可是树太高了，他_他爬不上去。mm...他_他想_e 挖水于是他带来的...他_他用_e 带来的挖地手套，_e 往地地下挖了一条深深的沟。他_他挖呀_e 挖呀终于_e 挖到了水。他_他高兴极了。然后...

(...しかし島には食べ物がほとんどありません。_e ヤシを穫りたいと（彼は）思ったのですが木が高すぎて（彼は）登れません。_e 水を掘り当てたいと（彼は）思ったので、（彼は）_e 持ってきたモグラ手袋を使って_e 地面に深い穴を掘ります。（彼は）掘って_e 掘って、ついに_e 水を掘り当てます。（彼は）嬉しくて仕方ありません。それから...)

(17) の日本語訳からも分かるように、日本語では不自然なほどの代名詞主語が中国語では使われている。(17) は登場人物が一人の場面であるので、これらの代名詞の指示対象がのび太であることは明らかである。よってここで出現した代名詞は、曖昧性解消以外の理由で出現していると言える。

また、名詞句を除き「代名詞+省略」の数を全体とした代名詞と省略それぞれの割合を見ても面白いことが分かる。(18), (19) から分かるように、名詞句を除いた場合、両場面における代名詞と省略の使用割合はほぼ同じであった。

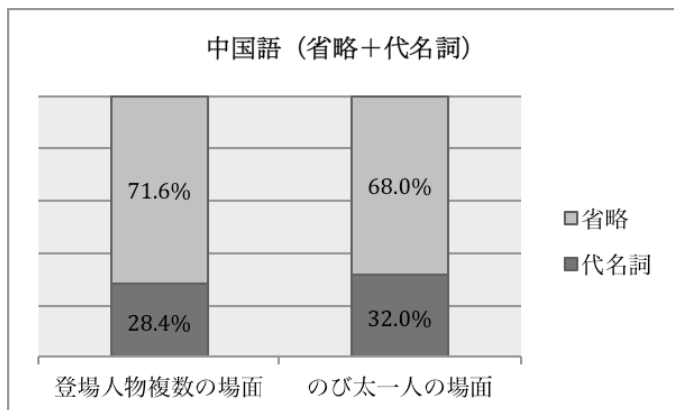
(18)a.

登場人物複数の場面		
代名詞+省略		
省略	71.6%	197
代名詞	28.4%	78
合計	100.0%	275

b.

のび太一人の場面		
代名詞+省略		
省略	68.0%	410
代名詞	32.0%	193
合計	100.0%	603

(19)



これは、本実験で出現した三人称代名詞 *tā* は音声上性などを区別しないため、三人称の指示対象しか登場しない物語では登場人物が複数の場面においても曖昧性解消に寄与していないため、登場人物が複数の場面においてもものび太一人の場面と同等の割合で代名詞、省略が現れたためである。つまり、中国語においては、曖昧性解消に関与しない代名詞主語が一定数使用されているということが、この実験結果から分かる。

これら2つの実験から、日中両言語において名詞句は曖昧性解消の目的で使用されることが分かった。この結果は語用論モデルの予測とも矛盾しない。しかし中国語の代名詞は曖昧性解消以外の何らかの理由で使用されていることも窺える。中国語で代名詞が用いられる場面で日本語では省略が用いられていることを勘案すると、中国語の代名詞の出現は中国語特有の事情が関与していると考えるのが最も妥当であろう。以下では、この点についてさらに検討する。

5. 実験データの考察

5. 1 中国語の代名詞主語と文接続

中国語では曖昧性回避とは独立して代名詞主語が用られるということが分かったが、ではいったい何が代名詞の出現を要請しているのでしょうか。実験データを詳細に吟味すると、“然后”（それから）や“就”（すぐに）の前後には省略が多く用いられていることが窺える⁵。

- (20) a. 他用一只玩具老鼠 *e* 把哆啦 A 梦给吓昏了，然后 *e* 从哆啦 A 梦的口袋里拿了好几样东西 *e* 打了个包裹，mm... *e* 就插上竹蜻蜓 *e* 就离家出走了。

（（彼は）おもちゃのネズミを使って *e* ドラえもんを気絶させ、（それから）*e* ドラえもんのポケットからいろいろなモノを取り出して *e* 風呂敷に包み、（すぐに）*e* タケコブターをつけて（すぐに）*e* 家出をしました。）

- b. 然后他...mm...带上一个...那个...小飞机...一样的东西，然后 *e* 跑到一个无人岛上 *e* 去了。然后，一开始 *e* 就很开心，然后 *e* 到处玩儿，mm...然后那个...*e* 拿出那些道具来，然后 *e* 发现那些道具一开始是一个闹钟，然后他想：...

（（それから）（彼は）小さな飛行機のようなものをつけて、（それから）*e* 無人島へ駆けて *e* 行きました。（それから）最初は（すぐに）*e* 嬉しくて、（それから）*e* あらゆる場所で遊び、（それから）*e* 道具を取り出すと、（それから）*e* 最初の道具は目覚まし時計だということが分かり、（それから）（彼は）「...」と思いました。）

これに関連して、井上（2003）と大河内（1967）の観察を紹介したい。井上（2003）は“就”と文接続の関係について、“就”がある場合は前件と後件が密接な関係にあることが表されると述べている。また、“就”のない条件文では特定の時空間に限定されない「論理」レベルの依存関係のみが問題にされるが、“就”がある条件文では特定の時空間での

個別の事態、「時間」レベルの依存関係が表されることを指摘している。それぞれの例は(21a, b)に示す通りである。中国語には文法範疇としての時制標示がないため、「時間」レベルの依存関係を表すには時間に関する副詞“就”が必要となるのだという（例文はいずれも井上 2003: 55 による）。

- (21) a. 日本法律 規定, 不 到 二十岁, 不 能 抽烟。
 日本の法律 規定する NEG 達する 二十歳 NEG できる 喫煙する
 （日本の法律では、20 歳にならなければタバコを吸ってはならない。）
- b. 明天天气 不 好, 我们 就 不 去 长城 了。
 明日 天気 NEG 良い 私たち JIU NEG 行く 万里の長城 ASP
 （明日天気が悪ければ、万里の長城に行かない。）

大河内（1967）は、明示的な接続形式のない複文において、主語の有無も節の接続に関わっていると指摘している。

- (22) a. 多 读 书 多 懂 道理。（よく勉強すれば道理に詳しくなる。）
 多く 読む 本 多く 理解する 道理
- b. 他 多 读 书, 多 懂 道理。
 彼 多く 読む 本 多く 理解する 道理
 （彼はよく勉強したので、よく物を知っている/彼はよく勉強し、よく物を知っている）

主語を明示しない（22a）のような場合は一般的な命題について述べた条件句であるが、（22b）のように主語が明示されると、前節と後節は因果関係、あるいは並列で解される。ここから主語の有無は文接続の意味関係に大きく関わっていることが分かる。また、この現象は、主語の有無によって一般的命題と個別の事態が区別されるという点で、井上の指摘する“就”の有無に関する観察と酷似している。つまり、主語の明示もまた、“就”と同様「時間レベル」の個別の事態を表す文の文接続を補う機能を担っていると言える。

主語の明示が文の繋がりに関する働きを担うのであれば、主語として現れる三人称代名詞も文の接続に関与すると考えられる。もしこの分析が正しいとすれば、主語の省略が不可能な場所でも主語の明示と同様の機能を担う“就”が現れれば、代名詞主語は省略可能だと推察される。実際、(23) のような文では、三人称代名詞“他”あるいは“就”を用いれば自然な文であるが、“他”も“就”も置かれなければ非常に不自然な文となる。“然后”（それから）も“就”と同様に前後の時間関係を明示する要素であるので、“就”と同様の効果が得られ、“然后”の後の主語は省略されることが多いと考えられる。

- (23) 然后, mm...坐下了以后, 他觉得有点...有点累, 有点饿 {??e/他/就}想“嗯, 那我看一看我从机器猫的口袋里拿了什么东西出来呢。”
- （それから少し休むと、（彼は）ちょっと疲れてお腹がすいたと感じ、{??e/彼は/すぐに}）「よし、じゃあドラえもののポケットから何を持ってきたか見てみよ

う」と思いました。)

このように、“就”や主語の出現が文接続と関わるのは、中国語は接続形式が乏しく明示的な時制標識を持たないためであると考えられる。つまり、他言語で接続形式や時制標識で表す情報を中国語では主語や時間副詞など他の要素によって補っているのである。

5. 2 日本語の主題主語と文接続

実験では、中国語と比べて日本語では省略が強く好まれることが分かった。特に名詞句の使用頻度が中国語と日本語でほぼ同じであることから、日本語においては指示対象の同定が不可能な場合以外は省略されるように見える。しかし、日本語においても主題主語が顕在的に現れるか否かと文の接続とは無関係ではない。砂川 (1990) は、前後の文の繋がりに何らかのギャップが生じた場合に主題となる主語が顕在化されやすくなると述べており、そのギャップには、脈略の不整合、時空間的なギャップなどが例として挙げられる。

(24) 脱落寸前で車をおさえながら僕は何度も同じことをくりかえした。そして〈e は〉やるたびに興味を覚えた。僕は、帰ってから女の子が両親に言いつけはしないかということが心配だった。《脈略の不整合》 (砂川 1990: 26)

(25) こう独り言を言いながら、マルイギンは銃に弾をこめ、ここで行われた悲劇の全てを知るため、あたり一帯を歩き回った。

マルイギンは倒れた紅松のそばにバンドの切れたライフル銃を見つけた。安全装置がかかっていた。《時間的なギャップ》 (砂川 1990: 22)

しかし、前後の文に何らかのギャップがあるからといって、必ず主題主語が顕在化するというわけではないようである。例えば、砂川の挙げた主語を省略すると不自然になる

(24)、(25) の例であっても、以下のように接続形式を補うことで省略が可能になる。

(24)'やるたびに興味を覚えた。しかし一方で、〈e は〉帰ってから女の子が.....

(25)'一帯を歩き回った。すると〈e は〉倒れた紅松のそばにバンドの切れた.....

筆者らの行った実験でも、次のようなデータが得られた。

(26) e ドラえもんのポケットから道具を適当にいくつか出して、e それを風呂敷に包み、e タケコプターをつけて、e 無人島へと向かいました。なかなか無人島は見つからないと e 思ったのですが、しばらくすると、ひとつの島が見えてきました。のび太君は喜んで、e その島へ到着しました。

この最後の「のび太君は」という主題主語は省略不可能であるが、以下のように換えることで省略可能になる。

(26)'なかなか無人島は見つからないと e 思ったのですが、しばらくすると、ひとつの島が見えてきて、〈e は〉喜んで、e その島へ到着しました。

(26) の文は、(26') のようにテ形を用いて前後の文をつなげることで主題主語の省略が

可能となる。ここから分かるように、中国語と同様に日本語においても主語の出現は文接続と密接に関わっていることが分かる。実験では、中国語に比べて日本語では省略が多く用いられていたが、これは日本語の方が中国語に比べて接続形式が豊富に存在することが関係していると思われる。つまり、日本語では、前後の文に何らかのギャップがあったとしても何らかの接続形式を用いることができるので、主語の省略が可能となるのである。実際に得られたデータでも、接続形式を多用して、文を連結させている発話が散見される。そして、そのような場合には主語が一貫して省略される傾向が顕著に見られる。

- (27) ...*e* 誰にも文句を言われずに、*e* 生活できるから...*e* すごく楽しんでいたんですけれども、*e* ご飯も食べなきゃいけないし、*e* 水も飲まなきゃいけないということ_で、*e* だんだん...
- (28) _{すると}意外にすぐ無人島が見つかった_{ので}、*e* そこに降りた_て、*e* 夜...寝_て...、*e* 次の日から探検しようと*e* 思って*e* 眠ります。_{それで}*e* 朝起きる...ときに、その*e* 持ってきた道具の中に目覚まし時計が入って_いて、...

5. 3 Li and Thompson 再考

前節までの議論で、中国語の代名詞主語には曖昧性解消以外に文接続を補う働きがあり、同じ分析が日本語の主題主語にも適用できることを述べた。これを踏まえると、2節で述べた Li and Thompson (1979) の「中国語の代名詞は前後の文の間に情報のずれが生じた場合に出現する傾向がある」という観察も合点がいく。Li and Thompson は「前後の文の間の情報のずれ」に関して具体的な定義を与えていないため、本稿で得られた実験により実際に検証することは難しいものの、何らかの形で文の接続を補わなければ前後の文の繋がりが希薄になってしまう場合に代名詞が挿入されるということは、まさに本稿の分析が予測する通りであると言える。

しかしながら、一見すると本分析と矛盾する事実もある。Li and Thompson は、“但”などの対比を表す表現の後には、前文との間に情報の転換があるため代名詞主語が顕在化される傾向があるということも指摘している。もし、本稿の主張するように、顕在的な代名詞主語によって文接続を補うことができるのであれば、“但”などで文接続を明示すれば、代名詞をあえて顕在化しなくてはならない積極的な理由がないと思われる。これに関連して、Holmberg (2007) は、ある種の言語では逆接を表す接続詞の後に代名詞主語が義務的に出現する場合があることを報告している(例文は Holmberg (2007:215) 参照)。

- (29) 他们 说 小明 不 会 讲 法语, 但是 * (他) 会 讲。
 彼ら 言う 小明 NEG できる 話す 仏語 しかし 彼 できる 話す
 (彼らは、小明がフランス語を話せないと言ったけど、話せるよ。)

ここで注目すべきは、(30) において代名詞主語の省略が可能であることから、(29) で

代名詞主語の出現を要請しているのは接続詞“但是”自体ではないということである（例文は Holmberg (2007:217) 参照）。

(30) 小明 不 会 讲 法语, 但是 (他) 想 学。

小明 NEG できる 話す 仏語 しかし 彼 たい 学ぶ

(小明はフランス語を話せないけど、勉強したいと思っている。)

Holmberg (2007) は、主語省略を許す言語のうち、中国語のように極性疑問文 (yes-no question) の返答に通常動詞を用いて答える言語では、(29) のように極性に焦点が当たっている場合は主語の省略が許されず、日本語のように通常「はい・いいえ」で答える言語では省略が許されると主張している。(30) では、極性に焦点が当たっていないため、主語は省略してもよい。ここで用いられている“但是”は対比ではなく逆接であるが、ある種の接続詞を用いた場合、代名詞の省略可能性が、接続された文が何を焦点としているかによって決まるという点で Holmberg の指摘は注目に値する。つまり、“但是”のような接続詞の場合は、それが用いられているからといって必ずしも主語が省略可能であることを意味するわけではなく、より慎重な考察が必要であるように思われる。本稿の実験では対比の意味で用いられている接続詞は観察されず、現時点では Li and Thompson の指摘する対比を表す表現と代名詞主語の顕在化の関連に関して判断を下すのは難しいため、この問題は今後の課題としたい⁶。

6. 結語

本稿では、中国語の代名詞に関する問題を、3.3 であげた 4 点を中心に考察した。まず、中国語と日本語の対照実験を通して、中国語の代名詞は省略しても曖昧性が起きない環境においても頻繁に使用されることを明らかにした。そして、中国語において代名詞が頻出する理由として、中国語は時制標識がなく接続形式に乏しいため、代名詞主語を顕在化することで接続形式を補助しているからであるということ、日本語と比較することで実証的に論じた。主語の出現により文接続を補助するという方略は、中国語に限られるわけではなく、日本語においても主題主語の顕在化により文接続を補助することができることも示した。中国語の代名詞の顕在化とある種の副詞表現、とりわけ“但”の出現との相関に関しては、実験で得られたデータに対比を表す“但”が観察されなかったため、深い考察はできなかった。しかし、逆接の“但是”が用いられた場合、極性に焦点が当たっているか否かで主語の省略可能性が異なるという Holmberg の指摘から、ある種の副詞表現そのものが主語の顕在化を要請している可能性の他に、その他の要因が絡んでいる可能性も考慮に入れて、慎重な考察が必要であるということを示した。

註

¹ ただし、後述するように、日本語では代名詞の使用に特有の制限がある (Hinds (1978) 他)。

² Li and Thompson (1981: 135) は、無生物を指す“它”は使用環境が限られており、*tā* がトピック
或は主語としても機能するトピックとして用いられる場合、無生物を指示対象とすることができ
ない事実を指摘している。よって、(i) の *tā* の指示対象は有生物となる。

(i) *Tā* 很 好看。 (彼/彼女は見た目が良い。)

Ta とても 見た目が良い

³ (8) の“他”は主語ではなく主題であるが、Li and Thompson に従えば、主語に対しても同じ分析が
当てはまる。

⁴ 観察された代名詞は以下の 2 例でいずれも「のび太」を指示するものだった。

(i) ...「ここは僕の島だ！のびのび暮らすぞ！」と希望にあふれていたのび太ですが、えー、彼が
持ってきたものは、目覚まし時計だの、勉強マシンだの、などとロクなものがありません。

(ii) ...のび太は、ドラえもんの苦手な、ネズミのおもちゃを使って、*e* ドラえもんを気絶させ、...
そのすきに *e* 家出をすること...が、できました。そして、彼はタケコプターで空を飛んでいる
間...に *e* 考え、無人島に *e* 行くことに *e* 決めました。

⁵ “然后”は一つのイベントの後続いてもう一つのイベントが起こることを表し、“就”は二つの
イベントが連続して発生することを表す (呂 1980)。ここではそれぞれに「それから」「すぐ
に」という日本語訳をあてることにする。

⁶ これらの他に、中国語では、動詞が文目的語を取るときにも主節の主語が省略できない場合があ
る。例えば (i) では、A の発言から B の“觉得”の主語は“李四”であることは自明だが省略す
ることはできない。A の質問の返答ということから、この代名詞主語は文接続に関わっていない
のは明らかである。

(i) A: 李四 觉得 张三 最 聪明 吗? B: *(他) 觉得 他 最 聪明。
 李四 思う 张三 最も 賢い Q 彼 思う 彼 最も 賢い
 (李四は张三が最も賢いと思っていますか。) (彼が最も賢いと*(彼は) と思っています。)

一見すると、この代名詞主語は“觉得”という動詞の要請により出現しているように見えるが、
A の質問を“李四觉得谁最聪明?” (李四は誰が最も賢いと思っていますか。) とすると“*e* 觉得
张三最聪明” (张三が最も賢いと *e* と思っています。) という回答が可能であるため、“觉得”の要
請によるものではない。むしろ、(i) のように極性に焦点の当たった疑問文の返答の場合には主
語の省略が許されず、極性に焦点の当たっていない疑問文にすると主語の省略が許されるという
のは、Holmberg の指摘に合致するものであるといえる。

参考文献

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Clancy, Patricia M. 1980. Referential Choice in English and Japanese Narrative Discourse. In Wallace L.

- Chafe (ed.), *The Pear Stories: Cognitive, Cultural and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood, NJ: Ablex. 127-202.
- Fox, Barbara. 1987. *Discourse Structure and Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. 1983. Topic Continuity in Discourse: An Introduction. In Talmy Givón (ed.), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. Amsterdam: John Benjamins. 1-42.
- Grice, H. Paul. 1975. Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3*. New York: Academic Press. 41-58.
- Hinds, John. 1978. Anaphora in Japanese Conversation. In John Hinds (ed.) *Anaphora in Discourse*. Alberta: Linguistic Research Inc.
- Hinds, John. 1983. Topic Continuity in Japanese. In Talmy Givón (ed.), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. Amsterdam: John Benjamins. 43-93.
- Holmberg, Anders. 2007. Null Subjects and Polarity Focus. *Studia Linguistica* 61: 212-236.
- Huang, C.-T. James. 1989. Pro-Drop in Chinese: A Generalized Control Theory. In Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds.), *The Null Subject Parameter*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 185-214.
- Huang, Yan. 1994. *The Syntax and Pragmatics of Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huang, Yan. 2000. *Anaphora: A Cross-Linguistic Approach*. Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1987a. Minimization and Conversational Inference. In John Verschueren and M. Bertuccelli-Papi (eds.), *The Pragmatic Perspective*. Amsterdam: John Benjamins. 61-129.
- Levinson, Stephen C. 1987b. Pragmatics and the Grammar of Anaphora: A Partial Pragmatic Reduction of Binding and Control Phenomena. *Journal of Linguistics* 23: 379-434.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1979. Third-Person Pronoun and Zero Anaphora in Chinese Discourse. In Talmy Givón (ed.), *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*. New York: Academic Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Takami, Ken-ichi. 1987. Anaphora in Japanese. *Journal of Pragmatics* 11: 169-191.
- Tomlin, Russell. S. 1987. Linguistic Reflections of Cognitive Events. In Russell S. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins. 455-479.
- Tomlin, Russell S. and Ming Ming Pu. 1991. The Management of Reference in Mandarin Discourse. *Cognitive Linguistics* 2: 65-93.
- 井上優 2003. 「文接続の比較対照—日本語と中国語—」, 『言語』 32 : 54-59 頁。
- 大河内康憲 1967. 「複句における分句の接続関係」, 『中国語学』 176 : 1-12 頁。
- 砂川有里子 1990. 「主題の省略と非省略」, 『文藝言語研究 言語編』 18 : 15-34 頁。
- 吕叔湘 1980 『现代汉语八百词』 商务印书馆